

港船海

神戸港・中突堤のホテルに浮かび上がるクルーズ船

文・写真 上川庄二郎



点灯式に華を添える神戸市消防音楽隊

【二足お先に、神戸港開港二四〇年を祝って】

二〇〇六年末、クリスマスシーズンを迎えて、神戸メリケンパークオリエンタルホテル恒例のホテル壁面を飾る巨大イルミネーションの点灯が行なわれた。

この電飾は、一九九七年から続けられているから、昨年が満十年。その節目の年が、神戸港開港二四〇年と重なったこと、それに客船バースの中突堤シフトも加わって写真のようなみなと神戸を象徴するクルーズ船をイメージしたイルミネーションがデザインされた。開港したのは、一八六八年二月一日だから二足お先にといいところ。

点灯式には、元客船の船長やこの日にこのホテルで挙式したカップルも加わり「ボン・ボヤージュ」の発声で一斉にボタンが押されると、鮮やかな色合いの船の絵が浮かび上がった。クルーズ船・ルミナス神戸2からも祝福の汽笛。続いて神戸市消防音楽隊の演奏で、晴れやかな式典に色を添えた。

【世界でもユニークな海に浮かぶホテル】

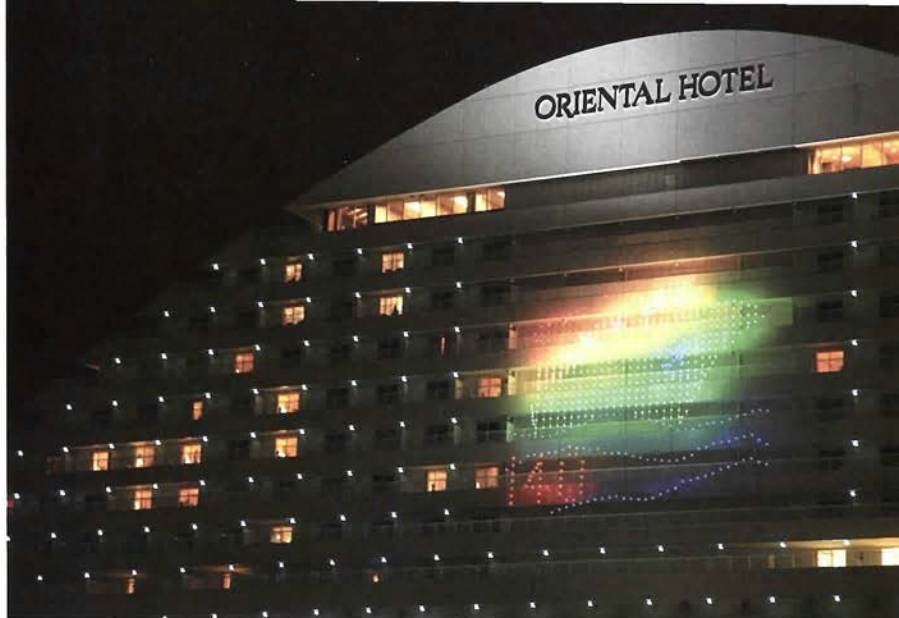
このホテルは、神戸市の港活性化のコンペに応じて提案されたプロジェクトで、21世紀に開かれた都心のウォーターフロントの創造、文化拠点の創造、新たな港湾ターミナルの創造を目指した海上ホテルとして一九九五年にオープンした都心の海上リゾートホテル。

客船バースの中突堤シフトによつて、このホテルは、いよいよその真価を発揮するところとなつた。

外観は、海洋博物館やポートタワーとデザイン上から



ルミナス神戸2の汽笛は、みなとの勢開気を盛り上げた



もよくフィットし、また照明のカラーコンディショニングでは、著名な石井幹子照明デザイナーによるエメラルド・ブルーの光のポイントがポートタワーの赤、海洋博物館の白とよくマッチして、海辺の素晴らしい光の空間の雰囲気醸し出している。まさに海辺の巷である。

こういったところが若者にも好感され、デート・スポットであるばかりでなく、ウエディング・ナンパワンというのもうなずける。



2006.11.22
Illumination
ライティングセレモニー

KOBE MERIKEN PARK
ORIENTAL HOTEL

【都心ターミナルとも、もっと便利に！】

昨秋三宮にグランド・オープンしたミント神戸、そのターミナルのオープンにあわせ、ホテルとターミナルをもっと便利にと、従来のシャトルバスをホテルオークラ神戸と共同運行し始めた。

新聞は、これを呉越同舟現代版などと揶揄しているが、これは当たらない。今や、メリケンパーク、中突堤界限は、神戸の新たな観光スポットとして人気が高まりつつあることを示していると思われるだろう。その何よりの証拠が、ホテル稼働率の大幅なアップという客観的な数字である。

何はさておき、神戸の活性化はみなとを除いては考えられない。まずは、このイルミネーション効果に大いに期待したいところである。



かみかわ しょうじろう

1935年生まれ。

神戸大学卒。神戸市に入り、消防局長を最後に定年退職。その後関西学院大学、大阪産業大学非常勤講師を経て、現在、フリーライター。

神戸
an essay
再発見

皇后陛下の御歌碑と 生田の杜の碑

加藤

隆久（神戸芸術文化会議長）
生田神社宮司

神戸市役所南隣に拡がる東遊園地に、昨年秋、皇后陛下の御歌を記した御歌碑が完成し、九月二五日大安の日に、井戸敏三兵庫県知事、矢田立郎神戸市長など約50人が参列して除幕式がおこなわれました。

笑み交はしやがて涙のわきいづる

復興なりし街を行きつ

平成十八年の正月、宮中歌会始での皇后陛下の御歌で、平成十七年一月に「阪神・淡路大震災十周年のつどい」ご臨席のため、天皇陛下とともに神戸市に行幸啓された際にお詠みなさったものです。

この御歌は、皇后陛下が神戸の街で出会う人々と笑みを交わし、復興の喜びを分かち合われながらも、それぞれの人が越えてきた苦難を思い涙ぐまれた御記憶を詠まれたものであります。

御歌碑は、私が「皇后陛下御歌碑建立委員会」の会長を仰せ付かり、井戸知事、矢田市長、稲垣



皇后陛下の御歌を刻む御歌碑（東遊園地）

神戸新聞社社長、新野神戸都市問題研究所理事長など有志で組織され、「皇后陛下の御心を永く後世に伝えるとともに、改めて災害に強い街づくりに取り組み誓いにしよう」との呼びかけが結実。能勢産の黒御影石製の縦1メートル、横2・4メートルで、日本芸術院賞などを受賞し日本のかな書道界の第一人者である井茂圭洞氏（神戸生まれ）が揮毫され、遊園地内の震災犠牲者の氏名を刻んだ「慰霊と復興のモニュメント」の北側に建てられました。



五十嵐播水の句碑(生田神社)

この御歌碑の建立は、復興に思いを寄せられた御心を後世に伝えるとともに、この御歌は、被災地の市民を勇気づけてくれると思われれます。今年も間もなく十二回目の震災の日がやつてまいります。

さて、生田神社の境内には、震災復興から阪神大震災復興に至るまでに八つの碑が建立されています。

昭和三十五年(1960)八月に生田神社神徳館横に、ふあうすと川柳社によつて建てられた楳元紋太氏の「よく稼ぐ夫婦にもあるひと休み」という御影石製の川柳句碑。この碑は阪神大震災で真つ二つに割れて破損しました。しかし平成十年(1998)、元通りに再建されました。

また、生田の森に生田神社の先々代の宮司(小生の父)加藤銭次郎の自詠の歌碑「ほのかなる土の香たちて青葉なす生田の森に雨晴れわたる 白魚」(瀬田真黒石製)があります。平成十七年、神戸史談会は創立百周年を迎えました。これを記念して、生田の森に聳える楠の大木の傍らに神戸史談会会長の不肖私の歌碑を建立してくれました。「ふるさとの

歴史究めて百年の歩みを語る杜の老樹に 白鳳」(庵治石製)です。

昭和四十八年(1973)九月に、神戸生まれの世界的箏曲家で、生田神社の結婚式「むすびの神曲」の「あなにやしえをとめを あなにやしえをとこを」を作曲した宮城道雄の音楽碑(青銅製)が、生田神社社会館前の桜とつじの植え込みの中に建立されています。

また、笹波会会長桑田笹舟氏の揮毫による上田秋成の生田の桜を詠んだ黒御影石の書碑「汐馴れし生田の森の桜花春の千鳥の鳴きて通へる」が、生田神社斎館横に建っています。

さらに、神戸のかな書道家、深山龍洞氏の筆による順徳院の「秋風にまたこそ訪はめ津の国の生田の森の春の曙」の書碑が茶室神泉亭脇に建立されています。

お正月にふさわしい句碑は、五十嵐播水の「初暦めくれれば月日流れそむ」です(写真右上)。平成六年四月、俳句誌「九年母」の第八百号刊行記念として九年母会により、生田神社拝殿前の段葛に石路と方両の根方に建立されています。

生田池畔には阪神大震災復興記念碑としてチタン製の、拙詠「うるはしき唐破風もちし拝殿は地上に這ひて獣のごとし」「朱に光る唐破風今ぞ聳えたち羽をのばせし真名鶴のごと」の二首が建っています。



■加藤隆久(かとうたかひこ)
1934年生まれ

生田神社宮司、神戸芸術文化会館議長、神戸女子大
学名誉教授、文学博士、震災で倒壊した生田神社を
「御霊神社」として再建、神道史や地域史の研究伝
統云能やミュージカルのプロデュースと幅広く活躍。
神戸市文化賞、兵庫県文化賞受賞

森に還る

大谷 成章(ラリーライター)

剪画／とみさわかよの

昨年暮れ、俳優で、日本野鳥の会会長、コウノトリファンクラブ会長でもある柳生博さんの「花鳥風月の里山」と題した講演の記録を神戸新聞に頼まれた。紙面のスペースが限られていたので、カットせざるを得なかった話の一部をここに復活させてもらうと……

ぼくは山梨県の八ヶ岳の中腹で三十年間、森を作っています。密生して下草が生えていないカラマツの人工林を元の自然の植生に返そうと始めたところ、「元の豊かな自然はどんなのだろう」とやってくる人が増え、散策路やギョラリのあるパブリックスペース「八ヶ岳倶楽部」を作りました。いまは年間十万人がきます。

「八ヶ岳倶楽部」には、阪神・淡路大震災以後、駐車場にはたくさん数の神戸ナンバーの車が並びます。スタッフが「大変だったですね」と声をかけると、「深呼吸したくて来ました」と言っていました。ほこりだらけのまちから深呼吸しに来てもらって、スタッフは神戸の人たちと抱きあって泣いていました。八ヶ岳の花鳥

風月を語りあい、みなさんに笑顔が戻ってくる姿に、自然がどれほど痛み、悲しみをいやしてくれるかを実感しました。

柳生さんの話を聞くのは2度目で、一昨年に「八ヶ岳倶楽部」を訪ねたときも、なるほど駐車場の車の5分の1ほどは神戸ナンバーだった。奥様の手づくりのフルーツティーをいただきながら、「八ヶ岳で暮らすようになったのは、ぼくの原風景を求めて移り住んだからなのです」という話を聞いた。テレビの仕事が殺到し、ムリをすると家族や友人関係がボロボロになり、それをいやするのは少年時代に感動した八ヶ岳の自然の中に身を置くしかない、と思ったからだと言っていた。

災害に巻き込まれて、自分の身を一時よそに移すことで気力を取り戻し、新しく創作活動を始めた人は、たとえば谷崎潤一郎。関東大震災の後、阪神間に移って、六甲の山並みや住吉川の流れを身近に感じながら『細雪』を書いた。永井荷風は、アジア・太平洋戦争の空襲を逃れて明石に移り、

青い海、白い砂浜、輝く日の光の中に身を置いて、生き続ける力を得た、と記している。

神戸っ子が「八ヶ岳倶楽部」を訪れて、白樺と落葉松の林の中で心に積もったほこりを払い、「さあ、がんばるぞ」と立ち直った姿は想像できる。

被災の現場で、たくさんの人たちからさまざまな要求を突きつけられ、どう応えていいのかわからない。「なにができるのだろうか」と迷う。そんなとき、一時、現場を離れて、全体を見渡してみる。「八ヶ岳倶楽部」を訪ねた人たちの中には、そうした人も多かっただろう。

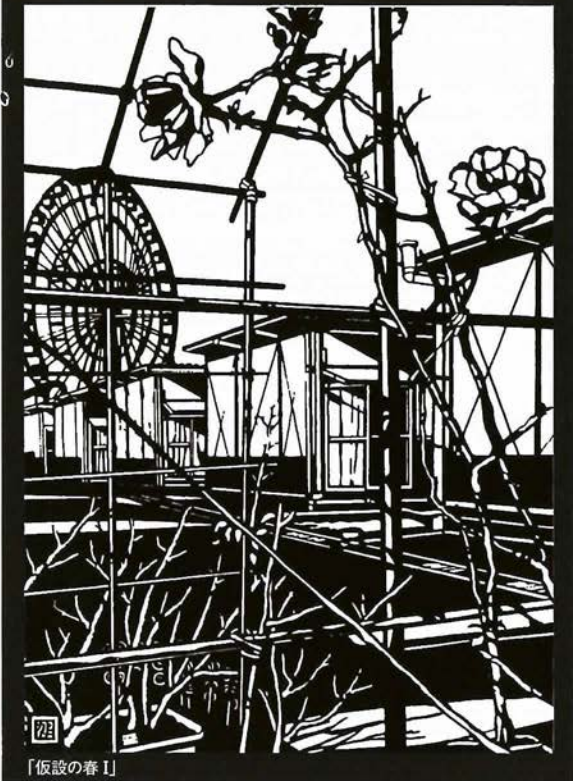
森や林がどれほど私たちを支えてくれるかを、柳生さんは語り続けている。

森には木霊がいる。木の精だ。根と幹と枝を駆けめぐって土と天空とをつないでいる。葉を茂らせ、実を結ばせる。葉は土に還り、実は鳥を育てる。自然の永遠の命の使者だ。森に入れば、人は命の永遠を実感することができる。

被災地には震災モニユメントがたくさんある。残骸になった建造物。祈りをこめた仏像や鎮魂碑。鷹取の大国公園の半面が焼け焦げた火止めのクスノキも、木の強さとやさしさを語っている。

震災モニユメントはいまもそれぞれのまちで作られている。中央区の神戸港貨物駅跡地でも震災復興記念の「みなとのもり公園」が計画されている。甲子園球場の3倍ほどの広さで、100年後には、六甲の山並みから海岸へ続く森林帯の一部になり、命の循環、魂の永遠を具現した森になることが夢だ。

いま、たくさんの方がどんぐりから苗木を育てている。この春、持ち寄って植樹が始まる。できれば震災の犠牲者の数、6434本の木を植え、木霊が住む森にしたい。



【仮設の春】

■大谷 成章（おおたに しげあき）1939年但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神戸2子編集者。その後フリーライター。「阪神淡路大震災10年」（共著、岩波新書）など。

出石町奥小野

出石アカル

絵 菅原洸人

題字 六車明峰

「なんや、ママやったんかいな。俺はまた、新しいパートのおばちゃんかと思たがな」

常連さんの一人が、家内を指しての言葉である。実は、家内が30年ぶりにヘアースタイルを変えたのだ。長い髪をバッサリと切ってしまった、うっかりするとわたしも見間違える。

その家内の故郷は、兵庫県北部に位置する出石町。この度の市町村合併で豊岡市になってしまったが、小じんまりとしたい城下町である。わたしの大好きな町だ。町のはずれに但馬の一の宮、出石神社があつて、祭神、天日槍（アメノヒボコ）の最初の妻の名を阿加流比売（アカルヒメ）と言う。彼女は太陽の光から生まれたと『古事記』にある。すこぶる美人であつたと。わたしのペンネーム「出石アカル」はこれに由来、はしない。残

念。だけどたずねられたら、面倒なのでこの来歴を答えることにしている。本当のところは、この連載の第23回「名前」を参照ください。

話が逸れた。家内の実家は、その出石神社からまだまだ奥の、山奥の、奥小野という在所である。「まんが日本昔話」に出てくるような里である。春になると、山の坂道でツチノコがコロコロと遊んでいる！。山に囲まれた集落の真ん中を清流が流れており、耳を澄ますと50mほど離れた高みにある実家の縁側からせせらぎが聞こえる。

傍らに鎮守があり、境内に杉の木が高く聳えている。そのてっぺんで、カラスが鳴く。

「カー、カー、カー」と鳴く。

と書いてしまえば当たり前だが、このカラスは、驚くなかれ方言で鳴くのだ。嘘ではない。低音から中音、高音と一鳴きごとに音程が上がってゆく。それが実にのんびりと聞こえる。「カー、カー、カー」ああ、音譜で表したいものだ。但馬弁特有の抑揚である。

そのカラスが、畑で悪さをするのだと、家内のお母さんがわたしに嘆いたことがあつた。せっかく植えた豆を、掘り返して食べてしまうのだと。そこでわたしは訊いた。

「なんでカラスは、せっかく植えた豆を食べるんですか？」と。するとお義母さんは、

「カラスはひまんだしきやーでひよーきやーな」と答えたものだ。

わたしは一瞬、「ポカン！」である。

実はその時、わたしはその話の前にも、お義母さんとの話の中で、疑問に思うことを根掘り葉掘り問い続けていたのだった。どうやら、いい加減うっとうしく思われていたようである。そこへ「なんでカラスは……？」である。パカにしていると思われたのかもしれない。しかしわたしは至って真面目だったのだ。あの山里で、人がせつかく植えた豆をわざわざ食べなくても、そこいら中にいくらでもカラスの食べ物ぐらひはあるだろうにと思つてのことだった。

「カラスはひまんだしきやーでひよーきやーな」

わたしの大好きな但馬弁である。「カラスは暇やからに決まってまんがな」
とでも訳そうか。

話をまた軌道修正する。

わたしの店「輪」は、昭和62年の暮れにオープンした。丸19年になる。

それまでは米屋を営んでいた。ところが時代の流れで、喫茶店に転業。そのオープン当初のことである。お義母さんが様子を見て来ておられて、家内のあまりの忙しき、苦勞の様子に、思わず漏らされた言葉が、

「しのびん、しのびん」であった。「忍びない、忍びない」の意である。「しの」を沈み込むように発声し、「びん」で語尾を軽く上げる。それが

わたしには何とも切なく聞こえたのだ。

お義母さんにすれば、こんな筈ではなかったのであろう。娘は、米屋に嫁がせたのである。一生、食いつぶれはないと思われたに違いない。米屋の奥様として何不自由なく暮らして行けると思われたのだ。この詳細は措くとして、時代が変わつたのである。

米屋の奥様の筈が、喫茶店のママとして、忙しく立ち働いている。しかもオープン当初である。

特別の忙しきである。「ああ、娘がこんな苦勞している」と思われたのであろう。実に悲しげで、切なげな「しのびん、しのびん」の言葉がわたしの胸に忍び込んだ。

そのお義母さんも地震があつた年の夏に亡くなられた。その後お義父さんも亡くなられ、家内の実家は、後を継ぐ者がいなくなり、このほど人手に渡つてしまった。この村も過疎がすすんでゆく。先日、お墓参りに行き、側を通つたが無性に淋しかった。

月日は流れたのだ。鎮守のカラスも、もう但馬弁で鳴いてはいない。ツチノコ？の姿ももう見ない。



■出石アカル(いずし・あかる)一九四三年兵庫県生まれ。「風蝶花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒークップの耳」(編集工房ノア刊)にて、二〇〇二年度第三十一回ブルーメール賞文学部門受賞。

《神戸異人館物語》

夜明けの
ハンター



ハンター肖像



三条杜夫

絵・谷口和市

運命の出会い

兵庫に続いて大坂にも外国人居留地が予定されていた。慶応三年に幕府と各国との取決めにより準備が進められたものの、かんじんの幕府が崩壊してしまったことよって、計画が宙に浮いてしまった。明治新政府がこれを引き継ぎ、外交等の問題を処理する機関として、安治川沿いに慶応四年四月、富島外務局を、その翌月には川口運上所を設置した。運上所では外交、関稅事務等の処理が行われ、後に税関と変わる。運上とは江戸時代に商、工、狩猟、運送などに従事する者に課せら

れた税の一種である。

川口運上所を設けた川口町一帯の二万六千平方メートルを川口居留地として造成を予定し、兵庫の居留地第一回競売の五日後の明治元年七月二十九日、大阪でも第一回競売が行われた。キルビーはこの競売にも参加し、第十七番区画三百五十五坪を七百十両余りで落札した。これにより兵庫に二箇所、大阪に一箇所、計三軒の商館を構える予定となったが、その計画に向けてキルビーとハンターは機械や雜貨類の輸入を始める準備にかかっ

ていた。

「医薬品ノ輸入モシタイノデスガ・・？」

ハンターがキルビーに提案した。アイルランドで、ハンターは医薬品の勉強をした経験がある。

「コノ国ハメディスンノジャンルガ遅レテイマス。コレカラハオソラク、メディスンガ必要トナルト私ハ思イマス」

アイルランドで薬剤師並みの知識を身に付けた自信に基づく意見である。青雲の志を抱いて世界を航海するには、人間の体を病氣から守ることが不可欠とハンターは考え、故郷を出るまで、真剣に薬学の勉強をしたのであった。

「私ハコノ国ガ好キデスガ、悪イ病氣ガ流行ルコトハ好キニナレマセン」

ハンターが横浜にやって来た慶応元年の三年前の文久二年には江戸でコレラが大流行し、囲碁の道で十二年間にわたり、無敗の地位を守り抜いて来た本因坊が三十四歳で死んだという話しをハンターは横浜で耳にしていた。囲碁は英国で言うチェスのようなものとハンターは理解し、日本で棋聖とあがめられる本因坊がもろくも、流行り病いに命を落としてしまったことに心を痛めた。

「囲碁ノ勝負ニ負ケタコトノナイ人ガ流行リ病イニハ勝テナイ。コノ国ハ野蠻デス」

これからいよいよ貿易の事業を始めるにあたり、医薬品の輸入もぜひ、行いたいとハンターは考えるのであった。キルビーは年下のハンターを部下と見るのではなく、腹心の相棒と思い、ハンターの意見を尊重することにしていたので、今回の提案を素直に受け入れた。屠牛業は新天地での事業

の手始めとしては一応の成功であった。が、今後の事業展開としては、商社として各種商品の輸出入が当然考えられねばならない課題であった。

大阪川口居留地への進出を見込んで、特にハンターは医薬品の取り扱いをアイテムに加える必要があると踏んでいた。それというのも、大阪には道修町という薬問屋が集まる地域があることを聞き及び、兵庫とは異なるビジネスの展開をすべきと彼なりのプランを描いていたのである。

ハンターの認識は正しかった。安土桃山時代に豊臣秀吉が大坂城を構えるにあたり、道修町を中心に薬業を盛り立てよう促したこともあって、江戸時代に入ってから、薬の町の形態がいつそう整い、明治維新の今、道修町はますますその存在が日本全国にクローズアップされつつあるのであった。

ハンターの計画に役にたつよう走人塾の米田左門講師が文献を調べて報告してくれた。

「昔、中国からの帰化人の北山道修が大坂で医学を開いたところ、その腕が素晴らしいというので、次第に薬種業を志す者たちが集まって薬の町を築いて来たんですね。文政五年に大坂でコレラが流行った時には、虎の頭の骨を砕いて作った虎頭殺とらごうくわん鬼雄黄田とらごうくわんという薬が道修町で作られ、薬の町としての評価が高まりました」

「虎ノ頭ノ骨ガコレラニ効クノデスカ？」

ハンターが驚いて聞き返す。

「西洋医学デハ考エラレナイコトデス」

「ハンターさん、だからこそあなたの活躍の場があると私は思うのです。先進国の医薬品をどんど

ん日本に輸入して下さい。私はあなたに期待して
います」

左門講師の激励を受けて、ハンターは勇氣百倍
ヨーロッパからの医薬品の輸入を開始した。この
ことが思いがけない面で役に立ち、ハンター自身
の運命まで左右することになるとは、想像だに
出来ないことだった。

堂島川と堀川が合流したかと思うと、すぐに安
治川と木津川に分かれる。二つの川の間に横たわ
る三角地が川口居留地として予定されていた。木
津川の東に位置する江之子島上之町に薬種問屋「平
野常助商店」があった。大阪進出をもくろんでキ
ルビー商会は医薬品の輸入卸を開始したが、新規
事業の取引先を開拓中で、ハンターがしばしば大
阪を訪れては販路開拓に余念がなかった。平野常
助商店も、取引を始めて間もない得意先の一軒だ
った。

日本には秋霖しゅうりんという言葉がある。しとしとと秋
の雨が降り続くさまを表現した言葉だが、九月八
日に明治元年となった翌月、まさにその言葉通り
の秋雨が降る日が続いていた。天気の良いことに
もめげず、ハンターはその日も大阪入りしていた。
平野商店から輸入薬品の注文を受けていたことも
あり、雨だから得意先回りをやめるというわけに
はいかなかった。

「足もとの悪いなか、すまんこってすな」

番頭が泥にまみれたハンターの靴を見てねぎら
いの言葉を送った。この店は主人の平野常助が感
じのよい人柄であるので、従業員の躰までいき届

いている。

「大丈夫デス。レイニーデイニハソレナリノ日本
ノイメージガアルノデ私、レイニーデイ、問題ナ
シデス」

土間で合羽を脱いで、帳場の上がり口に鞆を置
かせてもらったハンターに番頭が言う。

「いとはんもおんなじことを言わはります。雨に
打たせてほしいちゅうて」

番頭の何げない一言だったが、その一言が人の
運命を左右する重大な糸口となったのである。

「イトハン、才嬢サンノ愛子サンデスネ、彼女、
雨ニ打タセテホシイ、言ウノデスカ？ ドウシテ
デスカ？」

鞆の中から注文の薬品を取り出しながら、ハン
ターは尋ねる。

「この間から高熱を出してはりますねん。もとは
腸わずらいやそうですけど、医者がもうどのいも
手の打ちようがないさかい、好きにさせてやりな
さいゆうことですねん。座敷で寝てもろうてまし
たんやけどえらい熱でして、いとはんが雨に打た
せてほしい言わはりまして、縁側にふとんを移し
たとこですわ」

ハンターがこの店を訪れるのは、三、四度目に
なるうか。帳場を助けたり、商品の管理を手伝っ
たり、かいがいしく働く娘がいた。主人常助の長
女で十八歳の愛子ということだった。珍しい外国
人の訪問にいつも笑顔で挨拶してくれる感じのよ
い女性だった。その娘が病気になるって医者から見
放されているという。ハンターは狐につままれた
ような気持ちだった。

「ドウシタンデスカ? コノ間オジャマシタ時ハ元氣ダッタデハナイデスカ?」

「あてらも不思議に思うてんですけど、急に病氣にならはったんです。あれよあれよゆううちに悪ならはって、明日をも知れぬ命にならりましてん」

明日をも知れぬ命という割りにこの店には緊張感がないことをハンターは感じた。逆に言えば、それほどまでに愛子の病状がもうどうしようもないほど悪化してしまっているということか。

「会ワセテ下サイ。愛子サンニ」

ハンターは何故かいたたまれぬ気持ちになって頼み込んだ。番頭が案内した奥座敷の縁側で、降り込む霧雨に打たれながら目を閉じたままの愛子の姿があった。一目見るなりハンターは叫んだ。

「オウ、ノウ! ミス愛子、雨、ダメデス!」

ハンターは愛子のそばに駆け寄ると、寝床ごと彼女を抱え込んで、座敷に運び込んだ。

うすすらと目を開けた愛子が虫の息で反応した。「あ、ハンターさん……」

あとが続かなかった。高熱におかされた愛子の熱気がハンターの顔にまで伝わってくる。

「ダイジョーブ、ナントカシマス」

ハンターはふとんごと愛子を座敷に下ろすと、靴の中から幾つかの薬を取り出して、その一包みを愛子の口にふくませた。

「スミマセン、オ水クダサイ」

丁稚が水を持ってくるまでの間、ハンターはじつと愛子の顔を見つめていた。そして手をそっと愛子の額に置いて目を閉じたままの愛子に小声でささやいていた。

「ダイジョーブ……。ヨクナリマスヨ……」

丁稚が運んできた土瓶の口を愛子の口にくっつけて、ゆっくりと時間をかけながら水を少しずつ愛子に飲ませるのだった。

「熱キツ下ガリマス。元氣ナリマスヨ、ミス愛子……」

水をふくませ終わると、ハンターは手ぬぐいを借りて水にしめらせ、そっと愛子の額の上に置く。





「あ、り、が、と」

うっすらと目を開けた愛子がそれだけ言った。

「ドンナニ熱高クテモ、雨ニ当タルノハヨクアリマセン。熱ハ私ガ下ゲテアゲマス。病氣モ私ガ直シテアゲマス」

やさしく言うとはンターは静かに座敷を離れ、主人の常助に面会を請うた。

「薬売る身が娘の命も救えぬのかと消沈しとりました」

常助がハンターの顔を見るなり、つぶやいた。いつもの元氣いっぱい主人の姿はどこに消えたのか、やつれはてた中年男がそこにいた。愛娘を死なせてしまうかも知れない悲しみにうちひがれている主人にハンターは言う。

「アキラメテハイケマセン。熱ハ原因ガアルカラ出ルノデス。原因ヲ取り去ル方法考エマシヨウ。私、薬作ッテ持ッテキマス」

「医者がもう駄目だから好きにさせてやりなさいと言うとるんですが・・・」

「失礼デスガ、日本ノドクター、出来ナイコト、ヨーロッパノ薬、病氣ナオセル可能性アリマス」

「ハンターさん、本当ですか？　うちが今扱っている支那やオランダからの薬ではどうしようもないと医者が言うとりますが」

「失礼デスガ、ソレ以上ニ優秀ナ薬ヲ私ガ調合シマス」

「ハンターさん、信じていいのですか？」

常助の顔にやつと持ち前の品の良さが戻ってきた。

「ハイ。私ヲ信ジテ下サルナラ、雨ニ打タセルノハ良クアリマセン。平野商店ハ薬売ル店デス。薬デミス愛子治シマシヨ。私ヘルプ約束シマス」

「ハンターさん、あなたの力で治せるものならぜひ、治して下さい。私にはかわいいかわいい娘です。あなたの薬でぜひ、愛子の命を助けて下さい」

常助は額を畳にこすりつけんばかりに、ハンターに頼み込んだ。

「日本ノドクターノ治セナイ病氣、私ノ葉デキツト治シテミセマス」

きつぱりとハンターは言い切る。

「最後ノ望ミダカラトイッテ雨ニ打タセルノダケハ良クアリマセン。モット熱高クナッテ愛子サン死ンデシマイマス。雨ヨリモ、店ノミナサンノ氣持チデ彼女ヲ包ンデアゲテ下サイ。オ願イシマス」
「解りました。ハンターさん、あなたのおっしゃる通りにします。奇跡を待ちます」

「奇跡ハ待ッテイテハ起コリマセン。待ツモノデハナク、作ルモノデス」

番頭と丁稚がそばにやって来て、主人と共に頭を畳にこすりつけてハンターに言うのだった。

「ハンターさん、お願いします！」

兵庫の紺部村の留吉の家にハンターが帰り着いた時には、暮れやすい秋の日がとつぷりと夜になっていた。夕食を取ろうともせず、自室にこもるなり、ハンターは菜種油のランプの灯りで、薬の調合を始めた。キルビーが心配してのぞき込む。

「ドウシタ？ 何かアツタノカ？」

事情を説明するのもどかしげに、色々な薬の調合を試みるハンターに、キルビーは

「ベストヲ尽クシテ平野商店ノ娘サンヲ救ッテアゲマシヨウ。ココニアル薬足りナケレバ、英国人ノ誰カ薬持ッテイナイカ、探シテミマス」

と、ハンターを激励する。愛子は細菌性の病氣におかされるとハンターは診ていた。細菌を殺す新薬が有効だろうと考えた。ちょうどふさわしい薬が数種類、英国から届いていた。これまで

の日本に流行った病氣は殆どが細菌性のものだとハンターはアイルランドのロンドンデリーで勉強した知識を活かして分析していた。だから、何よりも細菌をやっつける薬が日本には必要だと考えて、今にいう抗生物質系の医薬品を中心に本国から取り寄せていたのである。

自室に入ったきり出てこないハンターを心配して、タネがおにぎり味噌汁を運んできた。

「ハンターさん、これだと食べられるでしょう？ 人様を助けるには、自分自身が体力を付けないとね」

さりげなく氣遣う日本の母がそこにいた。久しく忘れていたロンドンデリーの母を思い出してハンターは胸が熱くなった。国を出て十年余り、無我夢中で新しいことへの挑戦の連続で人間らしい氣持ちを忘れてしまっていたが、思いがけなくも人並みの氣持ちを取り戻して、ハンターは何としても平野常助商店の娘・愛子の命を助けようと自分自身をふるい立たせるのだった。

つづく

注：大坂は、明治元年五月二日大阪府誕生を機に、それまでの大坂を大阪と改めました。当小説では歴史的事実に沿って、大坂と大阪を使い分けて表記しています。



■三條 杜夫（さんじょう・もりお）
フリーアナウンサー、放送作家。ルポラ
イターを経て、放送業界へ。経験にもと
づく地域活性化講師としての活動も評価
されている。著書に『いのち結んで』『室
の道七福神めぐり』『さうゆう人たち』
など。

夢のない所に
実現はない

海と真珠を

こよなく愛する男

田崎俊作

(田崎真珠株式会社代表取締役社長)

海からの贈り物・真珠とともに生きる

日本の真珠王

~King of Pearl~ Syunsaku Tasaki Story

田崎俊作物語 〈第一話〉

漫画：佐藤晴美

田崎俊作は
昭和4年
長崎県東彼杵郡松原村
そのき
(現在の太宰市) に生まれる

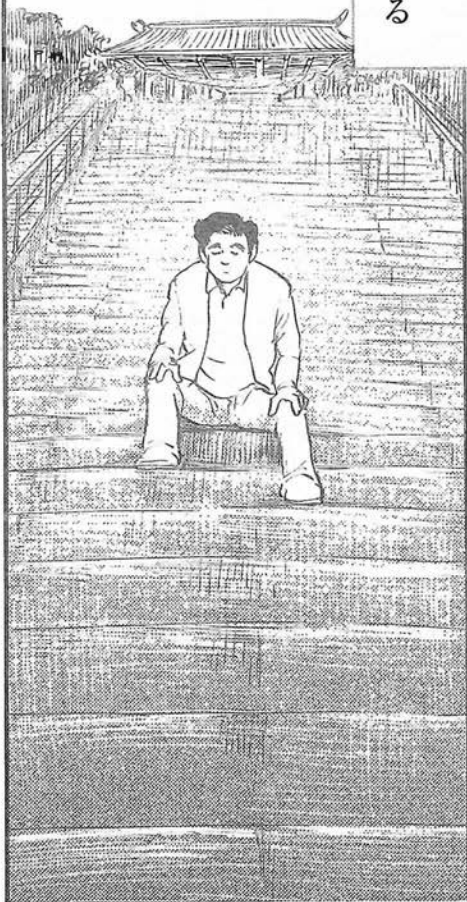
昭和20年4月
海軍兵学校に入学

規律正しい生活の中で
勉学・訓練に励むも、
入学して4ヶ月で
終戦を迎える――
77期生・最後の兵学校生
となった

昭和22年
長崎経営専門学校
(現在の長崎大学)
入学

物語は、戦後
郷里の長崎から始まる

1951年長崎
諏訪神社



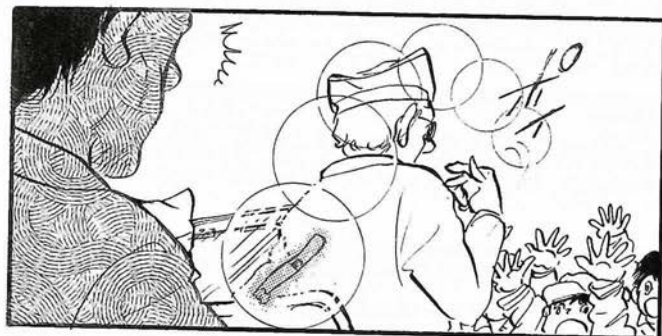
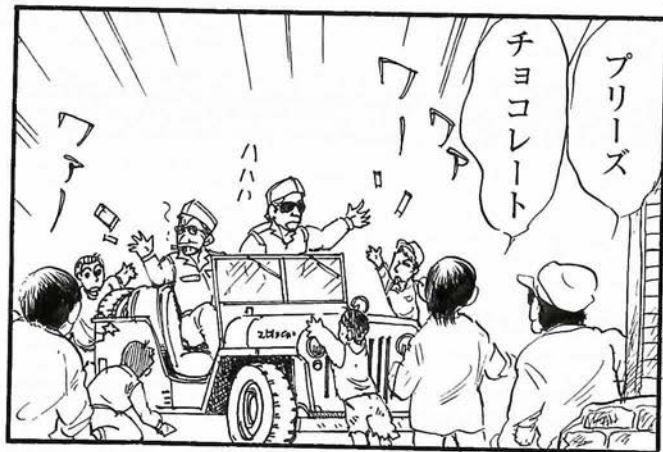
長崎経専を
卒業したら
どうするか

田崎俊作
22歳

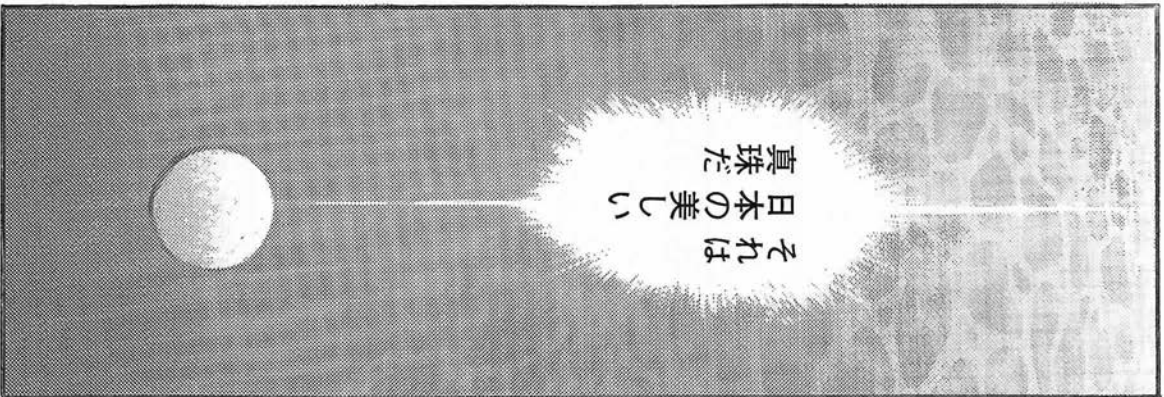


友人たちはほとんどが
商社や銀行に
勤めるというが――

毎日会社で
机に向かう仕事は
したくないなァ









私はこの海と真珠が
好きだった

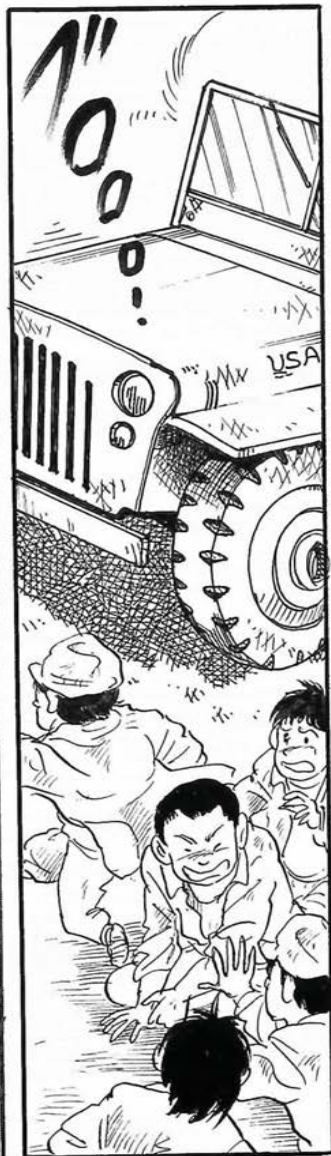
私はこの海でとれる
美しい天然真珠を扱う
真珠商になろうと思っていた



私の生まれた地
大村湾は
波の穏やかな伊勢と並び
天然真珠の産地である

父はこの地で
真珠の養殖業を営んでいた







オレは
夢を
実現させるんだ!!

55



夢に向かって進もう

私の進むべき
道が見えた